

カール・クラウス著、山口裕之・河野英二訳

『黒魔術による世界の没落』

現代思潮社 二〇〇八年四月

技術の危険性？

カール・クラウスは「技術の危険性」にかこつけて建物の装飾を非難する。いや、本気で非難しているかいなかは、定かでない。何しろ韜晦に満ちたその文章で、私がクラウスの意見と理解した箇所は、「軽薄な人間」の抱くかもしれないものとして開陳されるのだから。まったく……、何とも錯綜した自意識だ。乗り合い自動車導入の頃、その重量と振動によって通りに面した建物の装飾が緩み、事故が誘発される、だから乗り合いは軽量化すべきだし、道路は舗装すべきだ、と主張する「ある新聞」の記事を引用し、「なんと簡単に装飾が緩むことか」と皮肉混じりに詠嘆した後で、その「意見」は述べられる。

軽薄な人間であれば、装飾を廃止し、乗り合い自動車のおかげで装飾をはずしてしまうことが簡単になったことを神に感謝しよう、という提案さえ行うことであろう。そして、装飾をはずすことが、乗り合い自動車の振動によって引き起こされるので

はなく、むしろ自らの意志で行うようにしよう」と提案するであろう。その通り、技術のもたらす危険性は真の幸いであり、乗り合い自動車の発明は神の摂理の現れである、ということもまさにできよう。(97)

つまり、「軽薄な人間」は技術を言祝ぎ、建物の装飾を排除したがるに違いないということだ。  
装飾はバスの振動で落ちてしまいそうなものばかりでないことは、次の一節を読めばわかる。

誰でも知っている話だが、村の学校に通う子供に、板塀をどうやって作るんだい、と尋ねると、その子はよく心得ている。枠組みができたなら、それに「くそくらえ！」って、さつと書けば板塀の出来上がりだよ、と。しかし、カフェ・インペリアルを感激して訪問するものたちは、枠組みができあがってしまう前にそれが書いてあるので、もう満足してしまっている。塀は今日でも、実用性よりむしろ美しさが問題となっている。(100)

ここに翻訳者の山口氏は注をつけている。「カフェ・インペリアルに『くそくらえ！』そのものが書いてあるということではなく、カフェの装飾がこういった落書きと同じものだとしたことだろう」(107 訳注8)と。もちろんそうだろう。つまり装飾とはライオン頭の頭にフアサードやひさしや屋根に取り付けられるものばかりでなく、壁に描かれる絵でもあるということだ。それは例えばオットー・ヴァーグナーのデザインで名高いマジヨリカ・ハウスの外壁に見られるようなものかもし

れない。

しかし、何よりも興味深いのは、クラウスがこれらの装飾を髭に譬えていることだ（なるほど、マジヨリカ・ハウスの外壁の装飾は髭に見えなくもない）。



(図版はマジヨリカ・ハウス、橋本：72)

より悪しき世界はあまりに苦しみをたらすものとなるために、乗り合い自動車が改築されたカフェハウスのそばを通り過ぎてくればと願うだけでなく、このカフェの絢爛豪華な装飾をすべて一掃してくれるようにと、さらにはまた、その壁に取り付けてある装飾、その耳に張り付けてある髭をすべてきれいさっぱり持つていつてほしいと願うことになる。(101 傍点は引用者)

このように装飾を髭に譬えた上で、それを実用性と美のふたつの観点から論じている。

そういつた連中の付け髭は、その細工がさらに進歩したとすれば、次の瞬間には、照明器具とか、文鎮とか、ベッドサイドマトとかになつて姿を現すこともありうる。それには何か意味が

あるはずだ。それ自体でしかないということはあるまいだろうから。何か隠れた意味がないとすれば、誰がそんなものを顔につけて歩き回ったり、いつまでも商品として売りにだしたりするだろうか。しかし、答えを待つていたところで無駄なこと、何も出てこない。何か別のものになるわけでもない。さて、こういった顔髭は実用的ではない。「でも、きれいじゃない」と、こういった場合、うちの女中はいう。(101)

クラウスの文章が一筋縄でいかないのは、ここから実際に髭をはやした人間たちを批判し、揶揄しているからだ（「顔全体に髭をはやすに値しない顔こそが、そのような髭を必要としているのだ」、103）。いったいこの文章は建築批判の文章なのか、人物批判の文章なのか？

ここはクラウスなりに実用性の観点から、「何か隠れた意味がないとすれば、誰がそんなものを顔につけて歩き回」るだろうかと言ってみよう。クラウスのこの文章は建築も髭を生やした人をも批判するための文章に違いない。そしてそれなりの隠れた意味と機能を持つ。

## ウィーン

カール・クラウスがこれを書いているのが一九一三年のウィーンであることは常に念頭に置いた方がよい。これより少し前の時代、いわゆる世紀末の頃に、退嬰的な装飾にその特徴を發揮するいわゆるアール・ヌーヴオーの芸術潮流が最後に花

開き、その後一気にヨーロッパ全土のモダン・デザインの流れを牽引することになった（海野、129）、ここはその当の都市なのだ。ここでオットー・ヴァーグナーによる都市改造が始まるのが一八九四年のことだった。クリムトを領袖に仰いでいわゆるウィーン分離派が立ち上がるのがその二年後（橋本、70―78）。芸術と文化の都、世紀末ウィーンがこうして誕生した。

建築家は新しい様式の建物で街の景観を変えよう。アー・ヌーヴォーの、すなわちヴァーグナーの建築がどれだけ従来の建物と違ったか。

リング大通り建設最終段階の一九世紀末から二〇世紀初めにかけて造られたシュトゥーベン・リングにゆくと、東側にバウマンの設計になるネオ・バロック様式のいかめしい陸軍省の建物が建てられ、建物の前に旧陸軍省のあったアム・ホーフ広場から移したラデツキーの騎馬像が据えられる一方、大通りを挟んだ向かい側にはO・ヴァーグナー設計の郵便貯金局が、当時最新のユーゲント様式（アール・ヌーボー、ウィーンでは「分離派」様式と呼ばれた）の新しい優美さを見せており、両者の様式の落差に驚かされるのである。（田口、66 図版指示を削除。傍点は引用者）

こうしてウィーンの街は様相を変えていったに違いない。しかし、そういった変化への反動というよりはそのことの帰結に違いないのだけれども、世紀も変わり二十数年もすれば、人々の美意識は一変することになるだろう。機械化の時代の流れの中で、それに対応するような美意識が優勢を占めるようになる

に違いない。イタリアの未来派や、ドイツの表現主義のとりわけ映画だ。装飾やデザインであれば、よりシンプルでモダンなアール・デコが誕生するだろう。一九一三年のウィーンとは、まさにそうした美術史の流れの途上にあつて変化を先取りし、体現し、跡づけた都市であるはずなのだ。

そうした都市のそうした時代になされた発言であることを考えれば、クラウスのこの文章の立場をどう位置づけすべきかが見えてくるのではないだろうか。クラウスは到来しつつある機能性重視の時代の足音を感じ取りながら、直前の過去の美意識に疑問を呈しているのだ。

### ユダヤ人問題

一方でこの時期のウィーンを語る際に欠くことのできないのがユダヤ人の問題だ。芸術や文化はユダヤ人によって牽引されてきた。既に定住していて、自由主義ブルジョワの精神を引き継ぎ発展させた層だ。そこに新たな移民としてのユダヤ人が入り込み、両者の軋轢、および両者と非ユダヤ人の軋轢が生まれるのが一九一〇―二〇年代のウィーンの特徴だ。シオニズムと反セム主義がきしみをあげていた。そこで若きヒトラーが彼の思想を形成させたのだと言えば、この問題におけるウィーンの重要さがわかるだろう（増谷、76―88）。

ユダヤ人といえ、髭である。

もちろん、すべてのユダヤ人が髭を生やしているわけではない。クラウスもユダヤ人だったが、一生髭を蓄えなかったそう

だ(108、訳注14)。しかし、典型的なユダヤ人像というと、私たちはどうしても、黒い法衣に帽子、もみあげから顎までのたつぷりとした髭づら(「耳に張り付けてある髭」を思い描かないではいられない。つまりクラウスのこの文章は、建築批判に仮託したユダヤ人批判と取れるということだ。

自身ユダヤ人であるクラウスがユダヤ人を揶揄し批判するかのような文章を書いていたとしても不思議はない。既に述べたように、ウィーンでは古くから定着していたユダヤ人と新しく流入してきたユダヤ人の間に軋轢があったのだから。「ウィーンの『ユダヤ化』を、わけても声高に批判したのは、ユダヤ人自身であった。反ユダヤ主義はとりわけユダヤ人に強かったのである」(池内、82―83)とのこと。

しかし、だからといってクラウスが反ユダヤ主義(反セム主義)を声高に叫んでいたと早合点するのも控えた方がいいだろう(「人種問題のような重大な問題についてあれこれ思いをめぐらせることはまだ全然ない」、244)。彼は建築物に仮託してユダヤ人的な髭づらを批判しているのだから。世紀末から二〇年代にかけてのウィーンの文化を牽引したのはユダヤ人だったけれども、文学や学問、音楽の分野に比べ、美術・建築の分野ではユダヤ人の存在感は際だっていなかったのだから(ただし、資金提供者は多かつたらしいが。増谷、84―86)。

## 批評

要するにクラウスの文章は、同時代のウィーンにあって存在

感を誇る二つの事象を揶揄し、批判したものだ。その「二つの事象」は建築物と人々と取ることも可能だろう。ユダヤ的なものと非ユダヤ的なものとも取れるかもしれない。いずれにしても、両面作戦のごとく二つのもの間にあつて二つのものに等しく痛快な一撃を与えている。しかもそれが、やがて来るはずの時代を鋭敏に感じ取りながらなされている。こうしたものを人は批評と呼ぶのだろう。

(柳原考敦)

## 文献一覧

クラウス、カール『黒魔術による世界の没落』山口裕之・河野英二訳(現代思潮社、二〇〇八)

この書物からの引用は末尾にページ数のみを記した。

池内紀「セイレーンの歌——一九二〇年代のウィーン」『現代思想 臨時増刊 総特集 一九二〇年代の光と影』第七卷第八号(一九七八)、81―83ページ。

海野弘『アール・ヌーボーの世界——モダン・アートの源泉』(中公文庫、改版、二〇〇三)

田口晃『ウィーン——都市の近代』(岩波新書、二〇〇八)

橋本文隆『図説 アール・ヌーヴォー建築——華麗なる世紀末』(河出書房新社、二〇〇七)

増谷英樹『歴史のなかのウィーン——都市とユダヤと女たち』(日本エディタースクール出版部、一九九三)